第126号　2025年6月20日

利根山光人

Toneyama Kojin

記念美術館通信
Memorial Art Museum News Letter

〒024-0043　岩手県北上市立花15-153-2
TEL/FAX 0197-65-1808

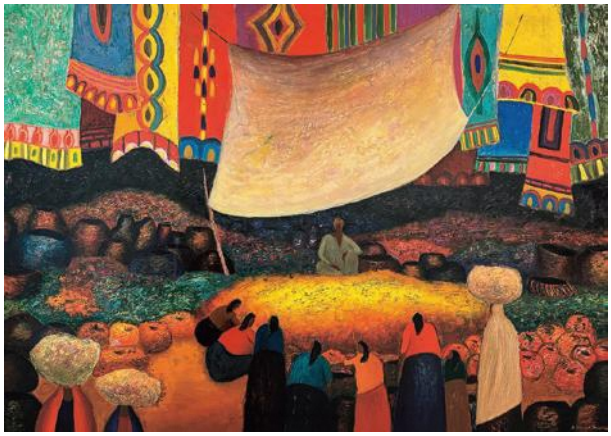
北上市立利根山光人記念美術館
西和賀町立川村美術館・デッサン館
交流企画展

利根山光人記念美術館中期企画展

孤高の画家 川村勇展

会期：令和7年
6月7日(土)－
8月24日(日)

今年度の中期企画展「孤高の画家　川村勇展」が、8月24日（日）までの会期でスタートしました。本展は、当館初の西和賀町立川村美術館・デッサン館との交流企画展です。展示を担当した専任研究員から、見どころを紹介してもらいます。



《インドにて》油彩、制作年不明

雪国から発するファンタジーの炎

鮮やかな色が目に飛び込んでくる異国情緒あふれる連作には多くの人々が描かれています。表情もわからないほど小さい顔や、特徴的にデフォルメされた体のフォルムは川村勇の画風として定着し、キュビスムやシュールレアリズムなど、近代絵画の枠にはまらない、奇妙とも言える唯一無二の世界を形作っています。

和賀郡湯田町（現西和賀町）生まれの川村勇は21歳で上京しましたが、画材を買うために売血するなど、生活は困窮を極めました。しかし、その志は高く、独学で身につけた絵画技法で頭角を現し、香港やヨーロッパでの修行を経て独自の画風を切り開きました。インドやポルトガルの光景を描くことをライフワークとし、好んで貧しい下町を取り上げました。

画壇に所属せず、人付き合いも多くなかったので「孤高の画家」と呼ばれましたが、故郷湯田への思いは強く、自分の絵を返す目的でこの地に、私財を投じて川村美術館と川村デッサン館を設立しました。ふるさとへの愛情と感謝の証としての絵画には根強いファンも多く、地元の方々にも広く親しまれています。

詩人で文筆家の駒井耀介氏（1940-2008）は「寡黙で強烈な赤と青の世界。それは、彼が生まれ育った雪国〈湯田の郷〉から発しているファンタジーの炎と言っていい」と、白い世界で育った原体験から生み出される色彩表現を解説しています。

本展は、昨年実施されたJR北上線全線開通100周年記念事業を受けて企画したもので、川村美術館では利根山光人作品展を同時開催しています。東西の交流企画展で二人の画家のコラボレーションを楽しんでください。

《帰路》油彩、1990年

関連展示　出張！川村デッサン館

川村勇の素描作品を中心に展示している「川村デッサン館」から、水彩や素描の作品をお借りしました。

美術館と併せてご覧ください。（※7月17日一部展示替え予定。）

会期：8月24日（日）まで
会場：北上市生涯学習センター内（おでんせプラザぐろーぶ3階）

5/24 sat　絵画修復見学会実施

今年で4回目となる絵画修復見学会。講師はお馴染み、絵画修復士の土師　広さんです。《舟と太陽》の剥落部分の補彩実演では、可逆性の説明に一同「おおー！」と感嘆の声も。質疑応答も盛り上がり、実りの多い見学会となりました。

～@TONE美～　パブリックアート考

専任研究員　菊地　仁美

③北上市内のパブリックアート

【前回第124号からの続き】

パブリックアートは「公共（空間）芸術」と直訳される。駅前にあるブロンズ彫刻や現代アーティストによる立体オブジェなどイメージされるのは様々だと思われるが、その定義はかなりあいまいである。見る者の感じ方次第というところもあろうが、ちょっと注意を払って路上観察などをしてみるとアートっぽいオブジェや壁の絵などは意外に多いものである。しかし、日常あまり興味をもってもらえない状況があることが切ない。パブリックアートの存在が無視されてしまうことはもったいないことである。

さて北上市にはどんなパブリックアートがあるだろうか。目立つところでは詩歌の森公園内に石造りの巨大なオブジェがある。木をかたどったものと思われるがかなり堅牢な作りが目を引く。同公園内には岩手出身で日本を代表する彫刻家、舟越保武の《EVE》と題する女性の全身像もあり、展勝地公園内のSL広場付近には桜並木の生みの親、澤藤幸治翁の銅像がある。こちらの公園には《向上一路》と題する少年の立像と、近くにはさくらをモチーフとしたオブジェも置かれている。街中の橋本児童公園には「寺山修司の文学碑」とされるオブジェがある。九年大橋のたもとの両サイドには巨大なステンレス製の湾曲したオブジェがかなり目立つ。

市役所にもさくらホールにもその内外には幾多もの彫像や絵画、オブジェが置かれていて、ちょっと意識して見渡してみても意外にパブリックアートの多いことがわかる。【次回に続く】

詩歌の森公園内にある
噴水塔のオブジェ（筆者撮影）

NEWS TOPICS

企画展「利根山光人　形と色の冒険」で新たな魅力発見

今年度前期企画展は、これまでと少し趣向を変え、市が所蔵している利根山作品の中から大胆な造形と色彩感覚が面白いものをピックアップして展示しました。特に、九州の装飾古墳からインスピレーションを受けた一連の木版画作品は、収蔵してから初公開となるものでした。

会期中の5月11日（日）には、「抽象から具象へ」と題した解説会も実施。熱心な美術ファンが集まり、中世宗教画の話から20世紀の、革命的とも言えるさまざまな表現の試みについて概要を学び、展示されている抽象的表現の絵画について鑑賞を楽しみました。

解説会参加者の感想（一部紹介）

- 美術史をもとにした抽象画への展開の説明をいただき、とてもわかりやすくあっという間の１時間でした。まわりまわって古代まで戻っていくお話にはびっくりしました。
- ルネサンスを始点とした美術史や絵画のテーマの展開といった視点で、解釈に頭を使う現代アートへの立ち向かい方や知識を武器に作品に挑んでいくことを勇気づけてもらえました。
- 有名な画家たちでさえ、常に模索して芸術と向き合っていた苦悩が今日の説明で感じられました。
- 一人の作家の作品にも多くの視点が存在することによって、楽しみ方が変わってくることを感じました。

発行　北上市まちづくり部生涯学習文化課
〒024-0061　岩手県北上市大通り1-3-1
電話 0197-72-8304　FAX 0197-63-3121

利根山光人記念美術館
●開館時間　10:00-16:00
（最終入館は15:30まで）